学習用語集（令和２年度作成）案

石教研国語（小）部会　副部長　西当別小学校　岩崎晋也

学習指導要領には、国語科の目標が「表現」よりも「正確に理解する」ことが先になったことや、「言葉による見方・考え方を働かせる（言葉への自覚を高める）」ということなどから、「読むこと」の「構造と内容の把握」「精査・解釈」が重要であることが示されています。教科書の単元名に注目してみても、４学年「ごんぎつね」では、「読んで考えたことを話し合おう」から「気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう」に変更されています。さらには、「気持ちの変化（変容）」というように、学習内容・指導事項を明確にしています。そこで、教師自身が学習用語を身につけ、定義を理解していることが必要と考え、2014年（平成26年）に作成された「学習・指導案用語集」を改訂いたします。以下の用語だけでは事足りないかもしれませんが、僅かでも授業実践の一助となることができれば幸いです。

１．説明的文章

|  |  |
| --- | --- |
| 題名（説明文） | 筆者が自分の主張を述べるためのキーワードといえる。※題名のつけ方で、説明の方向性が決まる。その多くは「筆者の主張」「題材」「話題・課題」の３種類に分類することができる。 |
| 形式段落 | いくつかの文で構成されたひとまとまりのもの。文頭は１字下げて書かれている。 |
| 段落の主語 | 各形式段落の中心となる語を形式段落の主語という。「何について書かれた段落か」の答えとなる。 |
| 意味段落 | 同じ内容の形式段落のまとまり。同じ主語が連なっているまとまりが意味段落で、主語の変わり目が意味段落の区切り目になる。 |
| 主語連鎖 | 形式段落の主語をとらえたときに、同じ主語がつながることを主語連鎖という。※主語連鎖から意味段落のまとまりをつかむことができる。 |
| 要点 | 形式段落の中で筆者が述べようとしている主要な内容。形式段落内の重要な文や言葉を短い文にまとめたもの。※要点をまとめる方法①形式段落がいくつの文で構成されているか調べる。②中心となる大切な文を見つける。　　・それぞれの文の役割を考える　　・それぞれの文の中から、結論が述べられている文を見つける。　　・形式段落の主語と述語から見つける。③抜き出した一文を短くまとめる。　　・主語、述語、キーワードを見つけて文にする。　　・文末を体言止めにする。 |
| 要約 | 文章全体のあらましをまとめること。まとめたものを要約文といい、段落（意味段落）の要点を、段落相互の関連を考えてつないだもの。物語の「あらすじ」にあたる。要約文は、「要旨」をふまえていることが必要。※要約文を書く方法その１　文章全体の構成を把握し、各段落（意味段落）の要点を取捨選択してつなげる。その２　筆者の主張である「要旨」の段落を簡潔にまとめる。 |
| 要旨 | 文章全体の中で筆者が述べようとする考えの中心となるもの。主張ともいう。文学作品の主題にあたる。文章を「具体」と「抽象」に読み分けた場合、「抽象」の部分に書かれている。※要旨をまとめる方法①文章が「頭括型」なのか「尾括型」なのか「双括型」なのかを見分け、筆者の主張の段落を見つける。②主張の段落の中にある「具体」を表す文と「抽象」を表す文を読み分ける。③「抽象」を表す文から、筆者の主張につながる言葉を抜き出す。④その言葉を使って要旨を書く。 |
| 序論、本論、結論（はじめ、なか、おわり） | 文章を基本的な３つの部分に分けて考えるときの、各部の名称。序論と本論が「具体」、結論が「抽象」の関係にある。 |
| 頭括型 | 結論が先に述べられた説明文のスタイル（基本文型）。※主張と事例との関係がとらえやすい。 |
| 尾括型 | 結論がおわりに述べられた説明文のスタイル（基本文型）。※教材としてよく取り上げられ、文例としてよく目にするもの。話題に対する関心をもたせたうえで、読者を引き込みながら筆者の主張に導く。 |
| 双括型 | 結論の部分がはじめとおわりに２つある説明文のスタイル（基本文型）※結論Ⅰは筆者の伝えたいことの骨子が前提として述べられるが、結論Ⅱは本論の情報を受けたうえで述べられるので、より詳しく主張性の強い内容になっている。 |
| 【基本文型の判別】１．形式段落を確認する。２．題名を問いに変える。３．問いを手がかりに、文章全体を序論、本論、結論の３つに分ける。　※文章全体を具体と抽象の２つの部分に分けて考え、抽象が書かれた部分が結論の部分である。 |
| 具体 | 個々のものごとの説明や事例の部分。 |
| 抽象 | 文章の中で具体をくくった部分。※具体：リンゴ、ミカン、バナナ　抽象：くだもの |
| 問いと答え | 「問い」とは、読み手を引きつけ、文章を書き進めるために筆者が書こうとする内容を疑問の形で提示した文のこと。「答え」とは、「問い」に対応する内容をまとめた文や段落のこと。※「問い」と「答え」に着目することで「何がどのように書かれているか」（文章構成）をつかんだり、筆者の主張を読み取ったりすることができる。 |
| 段落相互の関係 | 形式段落や意味段落の接続関係のこと。また、意味段落の接続関係をもとに、文章全体の構成を関係図として表現したものを文章構成図という。文章構成図を描くためには、意味段落の役割と関係（具体と抽象）を把握しておくことが大切である。 |
| 文章構成図 | 意味段落の接続関係をもとに、文章全体の構成を関係図として表現したものを文章構成という。 |
| 意見 | 自分の判断や自分の考えのこと。 |
| 理由 | 物事をそのように判断した根拠のこと。 |
| 事実 | 誰でも認知・認識できる客観的な事象・出来事のこと。※意見・理由・事実は文末表現や接続語で読み分ける。 |
| 文末表現 | 文末の述語の表現形式。※「問いかけ」「断定」「理由」「否定」「伝聞」「推量」など、筆者の意図を伝える。現象や出来事など、客観的な状況を表すものもある。文末表現に着目することで、文や段落の役割が明確になり、段落のまとまりをつかむことができる。 |
| 筆者 | 文章を書いた人（説明的文章、実用的な表現、説明文、日記、手紙、感想文、記録文、報告文、新聞、意見文、書画など）。 |
| 比較 | 二つ以上のものを互いにくらべ合わせること。※比較されているものに着目して読むことで、筆者が何を主張しているかが考えやすくなる。例：AとBを比較して、Aを強調する文章。　　AとBを比較して、Cに一般化する文章。 |
| 繰り返し | 繰り返すこと。反復。※表記の繰り返し→詩的表現としての繰り返し。その繰り返しで、リズム感が生まれ、音読の楽しさが味わえる。意味の繰り返し→同じ事柄を、いろいろな言葉に言い換えて繰り返す。その繰り返しにより読者の興味・関心を引きつける。構成の繰り返し→詩や説明文では、文章構成のリフレイン（繰り返し）が効果的に使われる。特に、説明文では、その繰り返しにより、説得力のある文章になる。 |
| 順序 | ある基準に従った並び方。※時間的順序、事柄の順序、一般的なもの→特殊なもの、易しいもの→難しいもの、簡単・単純なもの→複雑なもの、知られているもの→あまり知られていないもの、見えるもの→見えないもの、具体的なもの→抽象的なもの、普通のものからだんだん意外性のあるものへ、読者の驚きが小さいものから大きいものへ、読者がわかりやすいもの・身近に感じるものから順に、ある価値判断に照らした順序、重要度の高い順序、説得力の高い順序 |
| 表 | 縦と横の２つの軸で内容を整理して表したもの。※①整理する→段落のまとまりや関連がわかる。　②比較する→比べているいくつかのものの相違がわかる。　③説明されていること、省かれていることがわかる。 |
| 「　」かぎ括弧 | 会話文、引用、作品名、強調を表す。『　』二重かぎ括弧→会話文の中の会話、雑誌名、強調（　）丸括弧・パーレン→内心語、補足説明〈　〉山括弧→小見出し、タイトル、強調〔　〕亀甲括弧→引用の補足、強調［　］角括弧・大括弧・ブラケット→（　）の中に（　）を入れるとき　　　　　　　　　　　　　　　　　　例［○○（…）］【　】墨付き括弧・墨付きパーレン→強調、目立たせたいとき※文章の具体と抽象がとらえやすくなる。 |
| 複合語 | 本来それぞれの意味をもっている言葉が、２つ以上結合して、新たな意味や機能をもつようになった言葉。※「問い」に「複合語」が含まれている場合は、「問い」に対する「答え」の数が複数ある。 |
| 「は」と「が」の違い | 副助詞「は」語と語の関係を示しつつ、特別な意味を添えるはたらきをする。他と区別して言う意味を示し、「題目」のはたらきをする。話のテーマを明示し、これから何について述べるのかを明らかにする。主に判断文で用いられ、強調、類推、限定、添加、程度、並列、例示などの意味を文に付け加え、修飾語、述語などを強く主張する。格助詞「が」語と語の関係を示すもので、「を・に・が・と・より・で・から・の・へ・や」の10個。主に現象文で用いられ、動作や状態の主体、要求、願望の対象を示し、主語そのものを強く主張する。体言や副詞などに付き、上の語に副詞の性質や職能をもたせて、下の用語の意味を限定する。 |
| 接続語 | 文の接続に用いられ、あとに述べられる事柄が、前に述べられた事柄と、どのような関係にあるかを示す言葉。・話題を起こす→まず、はじめに、さて・順序を示す→まず、次に、最後に・列挙を示す→また、第二に、つぎに、このほかに、また、あるいは・具体を示す→たとえば・理由を示す→だから・話題を広げる・展開することを示す→しかし、ところで、では、それでは、さらに・まとめを示す→おわりに、こうして、このように |
| 指示語 | 物事を指し示す言葉。「こそあど言葉」と言われることもある。品詞としては、代名詞、形容動詞、副詞、連体詞に当たる。 |
| 時や季節を表す言葉 | 時間的表現と時間的描写とがある。時間的表現→１日の時間帯…朝、昼、晩、夕方、午前中　など　　　　　　１日単位の時間…今日、昨日、明日　など　　　　　　季節や時季…春、夏、正月、夏休み　など　　　　　　時間の経過…１年前、しばらくたって　など時間的描写→人物の心情を解き明かす「その次の市の日にも、…その次も、またその次も」場面の情景→「秋の日が、美しくかがやいていました。」 |

２．文学的文章

|  |  |
| --- | --- |
| 設定 | 物語全体に関係のある時、場所、人物のこと。５Ｗ１Ｈ（いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どうした）のうち、「いつ」「どこで」「誰が」にあたる。※設定の多くは、冒頭部分で紹介される。 |
| あらすじ | 文章や話の大体の内容を短くまとめたもの。展開を中心としたまとめであり、流れに直接関係ない場面や出来事は省略される。・「設定」を含めた５Ｗ１Ｈを手がかりとしてまとめる。・物語の設定を基準にして場面を区切り、場面の内容をつなぎ短くまとめる。・物語の構成として、出来事とその解決（結果）をとらえまとめる。・物語の基本構成を「はじめ・なか・おわり」の３部でとらえ、一文で表現する。例「ＡがＢによってＣになる話」 |
| 場面 | 事件（出来事）が起きているその場の様子。※文学作品は、いくつかの「場面」によって構成される。 |
| 登場人物 | 物語に出てくる人物。※動物や物でも、人のように話したり、動いたり、自分の意思で行動するものは登場人物といえる。 |
| 中心人物 | 物語の冒頭と結末で、考えや心情、行動が大きく変わる登場人物。※中心人物の様子や気持ちの変化や成長などによって物語は展開していく。心情や行動が大きく変わる人物が複数いる場合は地の文に着目し、語り手が寄り添う人物を探す。 |
| 対人物 | 中心人物に対して重要な役割や特別な人間関係を持つ登場人物。中心人物の心情や行動を大きく変えさせた人物のこと。 |
| 語り手 | 読者に対して物語を語る、物語内の存在（人物等）であり、「地の文」を語る話者の役割を果たす。話者ともいう。 |
| 視点 | 登場人物に寄り添って、物語を語り、展開する語り手の立ち位置のこと。一人称視点の物語…話者が「私」として登場する物語三人称視点の物語…話者が基本的に登場しない物語　・三人称限定視点…ある決まった人物の心を描く　・三人称全知視点…主な人物すべての心を描く　・三人称客観視点…誰の心も描かない※「ごんぎつね」のように、途中で視点が転換するものもある。 |
| 地の文 | 文学作品などで、会話以外の説明や語りの部分をいう。※大きく分けて「説明」と「描写」の２種類がある。「説明」は情報を伝えるのが目的で、「描写」は対象となる情報を表現することを目的とする。 |
| 会話文 | 登場人物が話している「　」のついている部分をいう。※会話文から、登場人物の心情や考えが直接読み取れる。 |
| 説明 | 物語の設定や様子、ある一定時間の出来事などを客観的にわかりやすく述べたもの。 |
| 描写 | 具体的な設定の中で起こる事件（出来事）や様子を詳しく書いたもの。※人物描写（行動描写、心理描写、性格描写、肖像描写、せりふ描写）、自然描写、情景描写などがある。 |
| 事件（出来事） | 物語の中で起きたこと。※いくつかの事件がつながって、物語になる。事件ごとの小さな変化がつながって、中心人物の大きな変容につながる。つまり、中心人物の変容の原因となるのが事件であり、これが物語の伏線ともなる。 |
| 変容 | 場面の様子の移り変わりとともに変わる人物の心情変化のこと。※物語は、最初と最後で中心人物が大きく変容している。 |
| 結末 | 中心人物の心情を大きく変えた事件・出来事（クライマックス）が終わるところ。冒頭・展開・山場・結末という基本構成の一部であり、その中で登場人物が最終的に到達した状況や場であり、作品の締めくくりの場面である。 |
| 冒頭 | 文章の書き出し、話の発端、物語の設定や状況を説明する部分。 |
| 心情 | 心で感じ取ったこと。ある出来事に接したときの心の中の思い。 |
| 情景 | 心情と景色が一体になったもので、①場の様子（風景）を表す　②登場人物の心情を表す（心を象徴する）の２つの意味がある。 |
| 基本構成 | 中心人物がどのようなことに出会って、どのように変容したのかという物語の流れのこと。※とらえ方としては「起承転結」「６つの点（冒頭、発端、山場の始まり、クライマックス、結末、終わり）」「三部構成（はじめ、なか、おわり）」がある。主な分け方①「現在」「過去」という観点　②「説明」「描写」という観点　　　　　③「視点」という観点　④「現実」「非現実」という観点　　　　　⑤「人物」という観点 |
| 叙述 | 物事の事情や書き手の感情・考えなどを書き記すこと。または、それらを書き記したもの。※書き記し方の違いによって、「説明」と「描写」の２つに分けられる。 |
| ファンタジー | 一つの作品世界の中に現実と非現実の二つの世界が存在している物語のこと。※中心人物が現実世界から非現実世界に入って行く展開と、何かが非現実世界から中心人物のいる現実世界にやってくる展開とがあるが、いずれも現実と非現実の行き来にスイッチが必要。入口と出口は同じ。 |
| 伏線 | 物語は、中心人物がさまざまな事件によって、変容する過程が描かれている。伏線とは、クライマックスに向けて、前もってそれとなく述べられている事件や出来事、人物の行動を含めた作品の「仕掛け」のこと。 |
| 山場 | 山場は、物語の四つの部（冒頭・展開・山場・結末）の中で、最も緊迫した場面である。 |
| クライマックス | 山場の中の最高潮の一点。物語において、感想や緊張が最も高まる部分。※中心人物の心情や様子が一番大きく変容したところで、主題が一番強く表れている。クライマックスの条件…①描写の文、または会話文である。②一文で書き抜ける。③心情が大きく変わるところ。④視点転換のすぐ後にあること。 |
| 人物関係図 | 登場人物の相互の関係や関わり方、それぞれの役割を図にまとめたもの。※中心人物と対人物を中心に人物像や関わり合いを示す。 |
| 題名（物語） | 「表題」「タイトル」などの言葉で表現されることもある。作者の最大のメッセージや作者の思いや考えが集約されており、読みの課題・ヒントにできる。 |
| 主題 | 作品の中にある作者の思想内容のこと。作品の内容から自然に見いだされるもの、あるいは、作者が意識して表現の中心としたものなどがある。※「主題を読む」とは、作品の表現を通して作者の意図を探ることである。 |
| おもしろさ | 文学作品のおもしろさには、内容のおもしろさと、表現のおもしろさがある。内容のおもしろさには、登場人物の心情の変容やお話の展開のおもしろさなどがある。表現のおもしろさには、仕掛けとしての構造的なおもしろさがある。また、一方向からは見えなかったものが、見方を変えると見える視点のおもしろさなどがある。 |
| 文語調 | 平安時代の文法または現代の口語体以前の文法に基づいて書かれた文章の調子のこと。古い時代の書き言葉で書かれた文章が「文語」であるのに対し、現在使われている、話し言葉で書かれた文体を「口語」という。 |
| 作者 | 文章を書いた人（物語的文章、創造的な表現、物語、小説、詩、創作文、脚本など）。 |
| 繰り返し | ・表記の繰り返し『大きなかぶ』の「うんとこしょ、どっこいしょ。」表記は同じでも、話している人物や人数、時や場所が変化することが多い。・構成の繰り返し『きつねのおきゃくさま』などの人物の登場の仕方や交わされる会話や出来事。※作品のおもしろさを感じることができる。強調したいことが見える。 |
| 動きを表す言葉 | 動いている様子・そのものの状態・存在などを表す語で用語に属し、動詞と副詞がある。・状態の副詞（ゆっくり、ときどき　など）・程度の副詞（ますます、かなり　など）・叙述の副詞（決して、なぜなら　など）・指示の副詞（こう、そう、ああ、どう　など）※自動詞→意志の強さ、存在の大きさ、確かさなどをとらえることができる。他動詞→他者との関係を明らかにできる。副詞→微妙な心の動きなどをとらえることができる。 |
| 表記 | 言語や文字や符号などで書き表すときのきまりのこと。・文章の表記に関するもの　使用漢字（漢字のみ、ひらがなのみ、カタカナのみなど）、文字の配列（縦書き、横書き）、段落などの示し方など・文の表記に関するもの　くぎり符号（句読点、疑問符、感嘆符など）、くくり符号（括弧、かぎ）、分かち書きなど・語の表記に関するもの（ひらがなとカタカナ、漢字などの使い分け、かな遣いなど・音の表記に関するもの・字の表記に関するもの※漢字→かしこまってカッチリとした印象、引き締まった感じ、固い・硬い・重い・冷たい・厳しい感じ。　ひらがな→親しみやすくゆったり大らか、柔らかいイメージ、軽い・あたたかい・明るい・優しい感じ　カタカナ→シャープで斬新、格好いい印象※作者の強調したいことや意図をつかむことができる。 |
| 対比 | 異なる要素を際だたせ、A、Bどちらかもしくは両方の違いの部分を強調すること。A、Bの共通の要素を強調する比較を「類比」という。比較される要素→色、時、場所、人物の性格や様子、場面※強調されたものや、象徴されたものを読むことができる。 |
| 比喩 | ある物事を類似または関係する他の物事を借りて表現すること。ある物事を別の物事に見立てなぞらえる表現。文学的な表現において心象やイメージを利用して、説明や記述をわかりやすくし、強調や誇張の効果をあげるため、類似した例や形容で表現することをいう。 |

≪参考文献≫

『国語教育指導用語辞典　第四版』（教育出版）

『国語授業を変える「用語」』（文溪堂）

『国語授業を変える「原理・原則」Ⅰ説明文編』（文溪堂）

『国語授業を変える「原理・原則」Ⅱ物語・詩編』（文溪堂）

『カラーワイド新国語要覧　増補第三版』（大修館書店）

『改訂版新総合国語便覧』（第一学習社）

『広辞苑　第５版』（岩波書店）

『これだけは身につけたい国語科基本用語』（明治図書）

『実践へのヒント　国語科授業用語の手引き　第二版』（教育出版）

『類語新辞典』（角川）

『国語辞典』（旺文社）

『夢の国語教室創造記』（東洋館出版社）

『小学校　子どもが生きる国語科学習用語』（東洋館出版社）